熊本地震復興支援展示と東日本大震災復興支援展示「みちのくの郷土玩具と出土品」

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

2016年4月14日、九州地方を震源とする大規模な地震が発生し、今なお大きな揺れが続いている。このため熊本県や大分県などに甚大な被害が生じている。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

5年前の2011年3月11日、東日本大震災が発生した。当館では開館以来、東北地方の資料を継続して収集・展示を行っている。その総数は民俗資料約2,000点、考古美術資料約4,100点にのぼる。これだけの収蔵点数を有する当館の活動として、東北地方の文化に対する理解を深め、被災された方々に心を寄せることを目的に、同年7月26日から2階日本民俗資料、3階考古美術資料常設展示室の一部分を使用して東北地方の館蔵資料を紹介している。今後も特に期限を設けず、随時資料を入れ替えつつ息長く継続して「みちのくの郷土玩具と出土品」復興支援展示を行う。

また、東日本大震災発生から5年を経た今年秋の第78回企画展では「東北地方の玩具たち―東日本大震災を忘れない―」と題して、こけしを中心に東北地方の郷土玩具を紹介する。これは、近畿地方に暮らす我々が、より一層東北に思いを寄せる機会になればと企画した展示である。

そんな折、先述の通り熊本地震が発生した。九州地方の民俗資料もほぼ同程度収蔵している。東日本大震災復興支援展示にならい、5月11日から2階常設展示室の一部で熊本県の郷土玩具を紹介する展示を開始した。熊本県は福岡県、大分県、宮崎県、鹿児島県に接し、さらに有明海、島原湾をはさんで佐賀県と長崎県に対峙する、まさに九州の中心に位置する県である。海と山の資源に恵まれ、豊かな文化が育まれて郷土玩具も豊富に存在する。以下に今回の展示資料を紹介する。

「お化け金太」（熊本市）

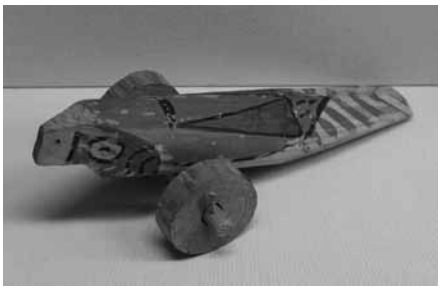
赤い顔で、黒い烏帽子をかぶった金太郎の首人形。張子製。首の後ろにある紐を引くと白目をむいて赤い舌がのびる仕掛けになっている。江戸時代に作られ始めたからくり人形で、動きがあるため戦前まで人気があった。一時期廃絶したが再び製作されるようになった。「目くり出し人形」とも呼ばれた。

似た玩具で千葉県に「ベロ出しチョンマ」のからくり人形がある。「お化け金太」には悲劇的な逸話はないが、真っ赤に塗られた顔は“赤物”の魔除けか、それとも隠された意味があるのか興味深い。

「おきん女」（八代市）

おきんとは少女の名前。日奈久温泉のみやげものとして江戸時代から伝わる。日奈久産の桐材を用いた木製玩具で、頭と胴に木片の手足を赤布で取り付ける。胴には花柄の胴模様を彩色し、同じ湯治場みやげのこけしを連想させる。逸話は、肥後の豪族の孝行息子が、父の傷を癒やすために杵島の神に平癒を祈願したところ、満願の日に娘の協力で効き目の高い温泉を発見したというもの。その娘の名前がおきんである。女児のままごと遊びに人気が高かった。

「雉子車」（人吉市）



野鳥のキジの形に削った木に車を付けた玩具。九州地方各地に見られる独特の玩具でさまざまなバリエーションがあり、東北地方のこけしとも対比される。こけしは人形で静的なのに対し、雉子車は実際に子どもが乗って遊ぶ種類もある行動的な玩具である。「雉子馬」とも呼ばれ、紐をつけて乗ったり曳いたりして遊ぶ。展示しているのは人吉盆地のもの。赤、黄、緑で鮮やかに彩色されているが、そのなかでも一際強い赤色は平家の落人伝説に因む。阿蘇を中心とした山間に暮らす木地師が木材を木馬に乗せて木馬道を下る作業風景は雉子馬の遊び方に似ており、雉子は木地にも通じると考えられる。

「肥後独楽」（熊本市）

高麗伝来と伝わる独楽で、ろくろ線の赤、黄、緑、黒の彩色が鮮やかで美しい。かたちによってトンボ、ボウズ、デベソ、タッツケなどと名前が異なる。下部の鉄の心棒に紐を一回巻き付けて両手の指で紐の端を持ち、上下に動かして独楽を回す。そのため、独楽は紐に吊り下げられたような格好で、横になって回ることになる。戦後まで子ども同士で曲芸を見せて遊ぶ姿が見られたという。